

ヨブ記11－14章「慰めから攻撃へ」

1A 信仰の絶対化 11

1B 罪よりも軽い罰 1－6

2B 計り知れない知恵 7－20

2A 愚かにされる人の知恵 12

1B 友人の物笑い 1－6

2B 生き物も知る主の御手 7－10

3B 神にある力と知性 11－25

3A 邪魔になる友人 13

1B 脳なしの医者 1－12

2B 命をかけた論争 13－19

3B 神の無慈悲の問いかけ 20－28

4B か弱い人間 14

1B 短い一生 1－6

2B 死後の世界 7－17

3B 望みをつぶす神 18－22

本文

ヨブ記 11 章を開いてください。私たちは、友人たちとヨブの議論を読んでいます。初めはエリファズであり、次にビルダデでした。ビルダデに対してヨブが答えましたが、今日はツォファルです。

もう一度、話の発展をおさらいしましょう。ヨブのところに三人の友人は、何も話さないで一週間、共に座っていました。その痛みはあまりに激しかったからです。そこで、ヨブが口走ったのが、「私は生まれてこなかった方がよかった」というものでした。そこで三人のうちの年長者エリファズが、ヨブを慰めつつ、そうではないだろうと語りかけました。「人は神の前で正しいということはないのだ。だから、あなたもへりくだって神に憐れみをすがるなら、神は立ち直らせてくださる。」と話しました。けれどもヨブが反論しました。「その罪というものに対して、今の苦しみは苛酷すぎる。神は私に厳しすぎる。私は耐えられない、はやく死にたい。」ということを行いました。

そこでビルダデがそれは違うだろうということで語り始めました。「そうではない、神は正義の方だ。だから、あなたもそうだが、あなたの子供にも罪があったに違いない。」ということを行いました。ヨブには身に覚えがないので、「あなたたちが分からなければ、私は神に訴える。けれども正しい神にどうやって訴えるのか？」という葛藤を口にしました。それを聞いているツォファルは、ヨブが自分をきよいとし、神を汚れたものとしていると聞いたのです。このようにして、ヨブを見舞いに来た友人たちなのですが、いつの間にか彼を激しく責めるような議論に発展したのです。

私たちは、これを見て「あらら」と思います。第三者的に上から目線で見てしまいます。けれども、これが前代未聞の出来事であったことを忘れてはいけません。何も悪いことをしていない、神に良心をきよく保っていたヨブがこれだけの苦しみを味わっているという前提があります。ヨブのような苦しみでなくとも、私たちはいとも簡単に、慰め手であるはずが激しく責める者へと変わってしまうのではないのでしょうか？これは、私たちのこれまでの神理解や聖書理解では分からない現実にぶつかる時、相手を責めていながら、実は自分自身が分からないという焦りの表れでもあるのです。ヨブだけでなく共にいる友人たちも生きていることについての深い意味を、この過ちを通して知ることになっていきます。私たちも同じように失敗をします。しかし、その失敗も神は益に変えてくださり、私たちがイエス・キリストの知識と恵みによって成長するために、与えてくださっているものです。

1A 信仰の絶対化 11

1B 罪よりも軽い罰 1-6

11:1 ナアマ人ツォファルが答えて言った。11:2 ことば数が多いければ、言い返しがないであろうか。舌の人が義とされるのだろうか。11:3 あなたのおしゃべりは人を黙らせる。あなたはあざけるが、だれもあなたを恥じさせる者がいない。

ツォファルはおそらく三人のうちでもっとも若かったのではないかと思います。その物言いが、最も挑発的だからです。前回、ビルダデの言い始めが、エリファズの時よりも直接的であることを話しました。エリファズは、「もし、だれかがあなたにあえて語りかけたら、あなたはそれに耐えられようか。しかし、だれが黙っておられよう。(4:2)」と言って、相手がどう受け止めるかを考慮しながら言い始めました。ビルダデは、「いつまであなたはこのようなことを語るのか。あなたが口にすることばは激しい風のような。(8:2)」と語調が強くなっています。けれども、厳しいのですが励ましのある、何とか希望を持たせるものを感じます。しかし、ツォファルは「あなたを恥じさせる」とまで言って、喧嘩腰になっています。

11:4 あなたは言う。「私の主張は純粹だ。あなたの目にも、きよい。」と。11:5 ああ、神がもし語りかけ、あなたに向かってくちびるを開いてくださったなら、11:6 神は知恵の奥義をあなたに告げ、すぐれた知性を倍にくださるものを。知れ。神はあなたのために、あなたの罪を忘れてくださることを。

ヨブは確かに言いました。自分が罪を犯していないと、そして「あなたは、私に罪のないことを知っておられ」と言いました(10:7)。しかしヨブは、「どうして人は自分の正しさを神に訴えることができますか。(9:1)」と言っているのであって、その話の流れを聞けば、神のような無欠を話しているのではなく、信仰の健全さを話していることは明らかです。けれども、ツォファルはそれをヨブの信じている教義のように聞いているのです。だから言い換えれば、ツォファルの信仰自体が単なる教義に基づいていることを示しています。

私は、このヨブ記の聖書講解で「実存」という言葉を使い始めています。実存というのは、「自分の存在をかけて」という意味です。つまり、その語られている事柄が本当なのかどうか、実際の現場を見てみる。そして、自分が体験できるようにしてやることです。たとえ直接体験できないものであっても、自分の存在をかけて取り組んでみる、ということでもあります。聖書的な言葉では、「みことばを**実行する人**になりなさい。(ヤコブ 1:22)」であります。御言葉について語っていて、それを実行していない時は、話している内容がツォファルのようにになります。言葉だけの寄せ集めになってしまい、実体が伴っていないのです。

ツォファルの続けて言っていることは、あまりにも辛辣です。6 節は、新共同訳ではこうなっています。「神が隠しておられる**その知恵を／その二重の効果をあなたに示されたなら／あなたの罪の一部を見逃して**くださったと／あなたにも分かるだろう。」二重の効果、すなわち神の裁きと憐れみがある。神の憐れみによって、あなたは今受けている苦しみが、あなたの罪以下のものであることを知るようになる、ということです。神の裁きにしたがえば、ヨブはもっと酷い仕打ちを受けてしかなるのだが、神の憐れみによってこれだけで済んでいるのだ、ということです。

2B 計り知れない知恵 7－20

11:7 あなたは神の深さを見抜くことができようか。全能者の極限を見つけることができようか。
11:8 それは天よりも高い。あなたに何ができよう。それはよみよりも深い。あなたが何を知りえよう。
11:9 それを計れば、地よりも長く、海よりも広い。11:10 もし、神が通り過ぎ、あるいは閉じ込め、あるいは呼び集めるなら、だれがそれを引き止めようか。

友人が当てている焦点は、少しずつ違っています。エリファズは、神の善について語り、その憐れみにすがりなさいとヨブに勧めました。ビルダデは、神の正義について語り、悔い改めて立ち返りなさいと勧めました。ツォファルは、神の知恵について語り、人間の思いを越えた深い知恵の前でへりくだれ、ということ話をしています。

11:11 神は不真実な者どもを知っておられる。神はその悪意を見て、これに気がつかないであろうか。11:12 無知な人間も賢くなり、野ろばの子も、人として生まれる。

これは、酷い物言いです。ヨブが不真実な者とし、また悪意あるものとして、それから彼を、野ろばの子のような無知な人間であるとしています。無知な人間が賢くなるのは、野ろばの子が人として生まれるぐらいの、奇跡的なことだということを強調しています。

11:13 もし、あなたが心を定め、あなたの手を神に向かって差し伸べるなら、11:14 ・・あなたの手に悪があれば、それを捨て、あなたの天幕に不正を住まわせるな。・・11:15 そうすれば、あなたは必ず、汚れのないあなたの顔を上げることができ、堅く立って恐れることがない。

「もし」という仮定で話しているようで、はっきりと、「お前は悪がある、お前の天幕には不正がある」と断じています。そして直接的に悔い改めよ、と言っています。

11:16 こうしてあなたは労苦を忘れ、流れ去った水のように、これを思い出そう。11:17 あなたの一生は真昼よりも輝き、暗くても、それは朝のようになる。11:18 望みがあるので、あなたは安らぎ、あなたは守られて、安らかに休む。11:19 あなたが横たわっても、だれもあなたを脅かさない。多くの者があなたの好意を求める。11:20 しかし悪者どもの目は衰え果て、彼らは逃げ場を失う。彼らの望みは、あえぐ息に等しい。

ツォファルは、ヨブが語った苦しみの中での言葉に一つ一つ触れています。自分が今、暗いところにいる、陰府に下るのみだと話していたのを取り上げて、「真昼のように輝く」と言っています。それからヨブは横たわっていても、恐怖があることを話しましたが安らかに休めることを話しています。そして、悪者については、あえぐ息に等しいと言っていますが、ヨブは息をするのも大変な状態です。

ツォファルは、直接、はっきりと具体的に語っています。彼は不正を相手が起こっているのだから、正してあげなければいけないと熱心になっています。けれども、その熱心さは神の義を達成するものではありません。ヨブは罪を犯していませんでしたが、たとえ罪を犯していたとしても、「自分自身も同じ所にいたら、同じ過ちに陥っていただろう。」という神への恐れを抱いていないといけなのです。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。(ガラテヤ 6:1)」

そして、私は人のした悪を聞いて、義憤に満ちることがあります。その時にふと思い返さないといけなことがあります。「もし本人に直接会わなければいけない時に、自分は同じ怒りを相手にぶちまけることはできるのか？」いいえ、相手も神の愛を必要としている哀れな罪人なのです。不義に対する怒りの中にも、憐れみと執り成しの思いが常になければいけないのです。

2A 愚かにされる人の知恵 12

ヨブは、このツォファルの言葉によって、怒りに満たされます。エリファズが語った後で、「なぜ、あなたがたは私が潔白であることを、信じてくれないのか。」と訴えていました。彼らから慰めを受けることを期待していたのです。そしてビルダデに対しては、「あなたの言っていることは正しいのだが、正しい神に対してどうして潔白を証明できよう。」と彼の言っていることに対して返答しようと試みています。しかし、ツォファルの言ったことで憤慨します。その失望と怒りの思いをぶつけていきます。

1B 友人の物笑い 1－6

12:1 そこでヨブが答えて言った。12:2 確かにあなたがたは人だ。あなたがたが死ぬと、知恵も共に死ぬ。12:3 私にも、あなたがたと同様に、悟りがある。私はあなたがたに劣らない。だれかこれくらいのことを知らない者があるのか。

「知恵も共に死ぬ」というのは、これが神から来た言葉ではなく、単なるあなたの語録であるということです。そして、ヨブは「あなたがたと同様に、悟りがある。」と答えています。ヨブも友人と同じような悟りだったのです。けれども、その悟りにしたがって今の状況を見ると、全く分からないことが降りかかったということを、ずっと訴えているわけです。

12:4 私は、神を呼び、神が答えてくださった者であるのに、私は自分の友の物笑いとなっている。潔白で正しい者が物笑いとなっている。12:5 安らかだと思っている者は衰えている者をさげすみ、足のよろめく者を押し倒す。12:6 荒らす者の天幕は栄え、神を怒らせる者は安らかである。神がご自分の手でそうさせる者は。

自分が友から物笑いになっていることを嘆いています。そして、その理由が、友たちが安らかだと思っているからだと言っています。これが重要な点です、安心できる所で物事を論じているのであれば、それは評論家のようです。キリストの体にある、「一部が苦しめば、他の部分も苦しむ」ということがなければ、その言葉はその弱さを支えるのではなく、押し倒すことになります。

そしてヨブは、彼らのことを「荒らす者」「神を怒らせる者」さらに、新改訳では出てきませんが、口語訳には「自分の手に神を携えている者」と形容しています。つまり偶像礼拝者と言っています。あるいは、新共同訳は「神さえ支配しようとする者」と訳しています。つまり、神の名をつかって安んじている、神を利用してまで自分の立場を守ろうとしている、ということです。

2B 生き物も知る主の御手 7－10

12:7 しかし、獣に尋ねてみよ。それがあなたに教えるだろう。空の鳥に尋ねてみよ。それがあなたに告げるだろう。12:8 あるいは地に話しかけよ。それがあなたに教えるだろう。海の魚もあなたに語るだろう。12:9 これらすべてのもののうち、主の御手がこれをなさったことを、知らないものがあるのか。12:10 すべての生き物のいのちと、すべての人間の息とは、その御手のうちにある。

ヨブは、ツォファルが「お前は、全能者の知恵を知っていない愚か者だ」ということを言ったので、「獣でも、空の鳥でも主の御手の中にあることを知っている」と言い返しています。生物のいのち、また人の息にも、神の豊かな知恵があり、天の天にまで探りを入れなくても見いだせるものだと反論しています。そうですね、とても小さなことに神の知恵があります。イエス様はそのことを話されました。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれた

ものではありませんか。(マタイ 6:26)」

3B 神にある力と知性 11－25

12:11 口が食物の味を知るように、耳はことばを聞き分けないだろうか。12:12 老いた者に知恵があり、年のたけた者に英知があるのか。12:13 知恵と力とは神とともにあり、思慮と英知も神のものだ。

ヨブは、この三人の友人よりも歳が若いようです。しかし、彼らが年を取っていても、それが彼らを賢くしていないことを、ヨブは自分が苦しんでいるのに彼らが間違った見方をしているので気づきました。主ご自身にのみ、知恵と力があり、思慮と英知があるのです。

ところでヨブ記は知恵の書であります。他の後世の聖書の巻に引用されている、また影響を受けている箇所が数多くあります。この 13 節は、箴言 8 章 14 節に影響を与えています。「摂理とすぐれた知性とはわたしのもの。わたしは分別であって、わたしには力がある。」

12:14 見よ。神が打ちこわすと、それは二度と建て直せない。人を閉じ込めると、それはあけられない。12:15 見よ。神が水を引き止めると、それはかれ、水を送ると、地をくつがえす。12:16 力とすぐれた知性とは神とともにあり、あやまって罪を犯す者も、迷わす者も、神のものだ。

神は圧倒的に人に対して力を持っており、また知恵を持っていることを説明しています。人は誰かを惑わしたり、また惑わされたりしますが、それらもすべて主の御手の中にあります。人の思惑も皆、神の手中にあるということです。

12:17 神は議官たちをはだして連れて行き、さばきつかさたちを愚かにし、12:18 王たちの帯を解き、その腰に腰布を巻きつけ、12:19 祭司たちをはだして連れて行き、勢力ある者を滅ぼす。12:20 神は信頼されている者の弁舌を取り除き、長老たちの分別を取り去り、12:21 君主たちをさげすみ、力ある者たちの腰帯を解き、12:22 やみの中から秘密をあらわし、暗黒を光に引き出す。12:23 神は国々を富ませ、また、これを滅ぼし、国々を広げ、また、これを連れ去り、12:24 この国の民のかしらたちの悟りを取り除き、彼らを道のない荒地にさまよわせる。12:25 彼らは光のない所、やみに手さぐりする。神は彼らを酔いどのように、よろけさせる。

議官や王、さばきつかさ、また祭司などは、その知恵と力を持っている代表的な存在です。彼らを愚かにし、卑しめることも、神は行われるとヨブは言います。使徒パウロが言いました。「知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。(1コリント 1:20)」神は、賢いと言われる者の知恵を愚かなものにされます。そして、力あると言われる者の力を弱くされます。しかも、それは人には愚かに思えること、弱く見えるものによって成し遂げられます。パウロは、それが十字架

のことは、宣教の言葉によって成し遂げられることを話しました。

そして、そうした王や議官たちが企んでいる闇のことも光に出します。そして、彼らを取り除き、闇の中での手さぐり、酔いどれのようにするという裁きも行なわれます。ここの箇所は、ダニエルが、ネブカデネザル王の見た夢を啓示で与えられ、神をほめたたえた時に引用した言葉でした。「神は、深くて測り知れないことも、隠されていることもあられし、暗黒にあるものを知り、ご自身に光を宿す。(2:22)」

こうしてヨブは、自分たちには知恵があるとする友人たちに対して、「その知恵も死ぬ」ということを強調したのでした。

私たちは改めて、人間の思いを超える神の知恵を思わなければいけません。神は、ヨブが正しい人だから彼をサタンの手に渡されました。これが人の思いを超えています。悪者がサタンの手に渡され、正しい人は悪から救われるはずなのです。しかし、神はヨブが正しいからこそ、その信仰が真正であることをサタンによって明らかにされようとしているのです。イエス様は、御霊によってサタンの誘惑を受けられました。そして、ヤコブ書では試練に遭う時は、この上もない喜びだとみなしなさいと勧められています。こうした神の逆説的な取り扱いについて私たちは見えています。

3A 邪魔になる友人 13

そして、ヨブは友人たちにかなり辛辣な言葉を浴びせます。

1B 能なしの医者 1-12

13:1 見よ。私の目はこれをことごとく見た。私の耳はこれを聞いて悟った。13:2 あなたがたの知っていることは私も知っている。私はあなたがたに劣っていない。13:3 だが、私は全能者に語りかけ、神と論じ合ってみたい。

ヨブは、友人たちに何か自分よりも知恵があるかもしれないという些かの期待がありました。けれども、ツォファルの言葉を聞いて、何ら自分のこれまでの悟り以上のものは持っていないことに気づいたのです。ヨブが受けてきたこれまでの神学、神についての知識では、今、受けていることは到底説明できません。それで全能者と語りたい、神と論じたいと言っているのです。

ヨブはビルダデと話していた時は、それをすればたちまち自分が罪に定められてしまうのではないかという恐れを持っていました。けれども、何か吹っ切れたようです。大胆にも神に論じようとしているのです。

13:4 しかし、あなたがたは偽りをでっちあげる者、あなたがたはみな、能なしの医者だ。13:5 ああ、あなたがたが全く黙っていたら、それがあなたがたの知恵であつたろうに。13:6 さあ、私の論

ずるところを聞き、私のくちびるの訴えに耳を貸せ。

偽り者、藪医者、そして黙っていたらその嘘が出てこなかったからまだ知恵があって良かったのに、と言っています。かなりキツイ言葉ですね。箴言にも、似たような格言があります。「愚か者でも、黙っていれば、知恵のある者と思われ、そのくちびるを閉じていれば、悟りのある者と思われる。(17:28)」

13:7 あなたがたは神の代わりに、なんと、不正を言うのか。神の代わりに、欺きを語るのか。
13:8 神の顔を、あなたがたは立てるつもりなのか。神の代わりに言い争うのか。13:9 神があなたがたを調べても、大丈夫か。あなたがたは、人が人を欺くように、神を欺こうとするのか。13:10 もし、あなたがたが隠れて自分の顔を立てようとするなら、神は必ずあなたがたを責める。13:11 神の威厳はあなたがたを震え上がらせないだろうか。その恐れがあなたがたを襲わないだろうか。
13:12 あなたがたの格言は灰のことわざだ。あなたがたの盾は粘土の盾だ。

ヨブはここで、「あなたがたは神に代わって説教しているが、そんなことはやめてくれ。あなたがたは、神の名を使って偽りを語っている。」と責めています。ヨブとしては、これが自分の罪のせいではないことは、はっきりと分かっています。しかし友人たちは、こんなにも確信をもって、神の名を使ってヨブを罪定めしているのです。したがって、彼らが嘘を付いていることが分かるのです。そんな嘘を、しかも御名をみだりに唱えていて、あなたがたは大丈夫なのか？と問いかけています。

ある注解書を見ましたら、興味深いことが書かれていました。「極度の苦しみの中にいる人はある種の感覚が鋭く研ぎ澄まされてきて、今まで感じなかった人間の欺瞞や、心の中にちょっとしたイヤらしさなどが敏感に分かってしまうということがある。」ということです。ちょうど、断食をした人が、臭覚が異常に研ぎ澄まされてきて、今まで感じなかった部屋の匂いや人間の放ついろいろな悪臭に悩まされるようになったというのです。それと似ているのでは、ということです。友人でさえ気づいていなかった偽りを、ヨブは嗅ぎ付けたのではないか、ということです。

そして最後、12 節に、灰の諺とありますが、それは空しい言葉ということで、粘土の盾というのは脆くて役に立たない弁護ということであります。

2B 命をかけた論争 13－19

13:13 黙れ。私にかかわり合うな。この私が話そう。何が私にふりかかってもかまわない。13:14 それゆえ、私は自分の肉を自分の歯にのせ、私のいのちを私の手に置こう。13:15 見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なおも、私の道を神の前に主張しよう。13:16 神もまた、私の救いとなってくださる。神を敬わない者は、神の前に出ることができないからだ。

ヨブは、やはり主ご自身に対して論じることは、自分が死ぬかもしれないというリスクを負ってい

ることを感じていました。それでも、命をかけて話そうとしています。そして、これで例え殺されたとしても、私は神を待ち望むと言っているところには、私は死んだ後でも生き、報いを受けるという大胆な信仰的な発言になっています。さらに、神ご自身が自分に対して責め立てる悪者どもから守ってくださることまで話しています。ヨブの苦しみの中で語られる言葉には、このように神の真実に届く言葉、信仰の言葉が時々出てきます。

13:17 あなたがたは私の言い分をよく聞け。私の述べることをあなたがたの耳に入れよ。13:18 今、私は訴えを並べたて。私が義とされることを私は知っている。13:19 私と論争する者はいつたいただ。もしあれば、そのとき、私は黙って息絶えよう。

今、敵陣に特攻に行くような思いです。正義の神、全能の神の前に出て、死を覚悟しての論争ということになります。

3B 神の無慈悲の問いかけ 20－28

13:20 ただ二つの事を私にしないでください。そうすれば、私は御顔を避けて隠れません。13:21 あなたの手を私の上から遠ざけてください。あなたの恐ろしさで私をおびえさせないでください。13:22 呼んでください。私は答えます。あるいは、私に言わせ、あなたが私に答えてください。

ヨブは、法廷に神を呼び出すのを恐れています。「あなたの手を遠ざけてほしい」というのは、私を脅かさないでほしいということです。神と自分を同じ法廷に置くことほど、恐ろしいことはありません。そして、神が呼び、それに彼が答えるか、あるいは彼が話し始め、神が答えるかのどちらかにしてほしいと言っています。

13:23 私の不義と罪とはどれほどでしょうか。私のそむきの罪と咎とを私に知らせてください。

ヨブがこれほどまでに苦しんでいる、それに値する不義と罪を知らせてくださいということです。

13:24 なぜ、あなたは御顔を隠し、私をあなたの敵とみなされるのですか。13:25 あなたは吹き散らされた木の葉をおどし、かわいたわらを追われるのですか。

神は自分に敵対している。自分は、引き散らされた木の葉のように、また、乾いた藁のようになっているのに、それでも脅し、追われることをしている、と言っています。

13:26 実にあなたは私に対してひどい宣告を書きたて、私の若い時の咎を私に受け継がせようとされます。

ヨブは、神が、若い時に行った愚かなことを持ちだして、そして酷い宣告を書き立てていると言っ

ています。ダビデも若い時の罪について、こう告白しました。「私の若い時の罪やそむきを覚えていないでください。あなたの恵みによって、私を覚えていてください。主よ。あなたのいつくしみのゆえに。(詩篇 25:7)」私たちは、若い時に犯した罪があります。若いために知恵を持たず犯した罪、負い目があります。何か自分の身に悪いことが起こると、それを思い出してしまうのです。ダビデはそれで、あなたの恵みによって私を覚えていてくださいと祈っています。

13:27 あなたは私の足にかせをはめ、私の歩く小道をことごとく見張り、私の足跡にしるしをつけられます。13:28 そのような者は、腐った物のように朽ち、しみが食い尽くす着物のようにになります。

これは、彼の体の状態を示しています。足かけをかけられた囚人、あるいは奴隷のようになっている。そして、自分の体は腐った物のようになり、しみが食い尽くす着物のようにっていると表現しています。

4B か弱い人間 14

そこでヨブは、このような弱められた体の中で、この地上における命のはかなさについて話し始めるのです。正しい者は報いを受け、悪者もその悪にふさわしい報いを受けるという神学、あるいは真実は変わりません。しかし今、それでも正しい者が苦しみを受けるという不条理を受けています。しかし、それがもし、死後の報い、死んでも再び生き返って、その新しい命と新しい体で報いを受けるのであれば辻褄があいます。ヨブは、極度の苦しみを通して、生きていること、死ぬこと、そして死んでからのことという、人間の核心部分について触れていくのです。

1B 短い一生 1-6

14:1 女から生まれた人間は、日が短く、心がかき乱されることでいっぱいです。14:2 花のように咲き出では切り取られ、影のように飛び去ってとどまりません。

人の命がこれだけはなかいということです。ヤコブもこう言いました。「あなたがたには、あすのこととはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。(ヤコブ 4:14)」

14:3 あなたはこのような者にさえ、あなたの目を開き、私をご自身とともに、さばきの座に連れて行かれるのですか。14:4 だれが、きよい物を汚れた物から出せましょう。だれひとり、できません。

このようなはかない人生の中で、どのようにして神の基準に達する清さを神の前に持ちだすことができるのか、できる訳ないではないですか、ということを訴えています。

14:5 もし、彼の日数が限られ、その月の数もあなたが決めておられ、越えることのできない限界を、あなたが定めておられるなら、14:6 彼から目をそらして、かまわないでください。そうすれば、

彼は日雇人のように自分の日を楽しむでしょう。

午前礼拝でお話ししましたように、人の命は短いだけでなく、神によってその日数さえも定められています。だから、この定められた短い日数を、その一日一日を日雇い人のように楽しむようにさせてください、と言っています。つまり、この激しい痛みによって神が自分に怒りの監視の目が向けられているということです。

かなり前になりますが、テキサス州で死刑囚にインタビューした CNN のラリー・キングの番組が印象に残っています。死刑囚は、カーラ・タッカーと言う人で、刑務所で聖書を手にして、クリスチャンになりました。完全な回心をしたので、彼女に死刑執行をしないでくださいという嘆願が州知事になされたことを覚えています。死刑執行の日が近づいているけれども、恐くないのかというラリーの質問に対して、確か、「一日一日を生きています。」と答えていたのを覚えています。ちょうど、ヨブがここで話している日雇人のような楽しみです。言い換えますと、イエス様が思い煩うな、一日の労苦は一日にして足れりという教えです。しかしヨブは、そのような楽しみさえも激しい痛みのために奪われている、ということです。

2B 死後の世界 7-17

14:7 木には望みがある。たとえ切られても、また芽を出し、その若枝は絶えることがない。14:8 たとえ、その根が地中で老い、その根株が土の中で枯れても、14:9 水分に出会うと芽をふき、苗木のように枝を出す。14:10 しかし、人間は死ぬと、倒れたきりだ。人は、息絶えると、どこにいるか。14:11 水は海から消え去り、川は干上がり、かれる。14:12 人は伏して起き上がらず、天がなくなるまで目ざめず、また、その眠りから起きない。

ヨブは、自然にある生命力が人間にはないことを嘆いています。つまり、木は切られても芽を出します。しかし、人は水が海から消えて、川が干上るようなものだと言っています。そうでしょう、人の目ではそれしか観察できないからです。だれが生き返った人々を見たでしょうか？

どうして木のような生命力を持たないで、人は死ぬのでしょうか？それは罪に閉じ込められているからです。アダムが罪を犯し、全世界が罪と死の定めの中に入ったからです。したがって、人が生き返るにはその罪が取り除かれなければいけません。だから贖罪、罪の贖いが必要であり、キリストの十字架刑によって、そしてよみがえりによって、人にも復活の命が与えられるようになったのです。

14:13 ああ、あなたが私をよみに隠し、あなたの怒りが過ぎ去るまで私を潜ませ、私のために時を定め、私を覚えてくださればよいのに。14:14 人が死ぬと、生き返るでしょうか。私の苦役の日の限り、私の代わりの者が来るまで待ちましょう。14:15 あなたが呼んでくだされば、私は答えます。あなたはご自分の手で造られたものを慕っておられるでしょう。

ヨブは、人は生き返らないものだと言いましたが、生き返ることを願っています。もし陰府に下ることで今の痛みと苦しみから解放され、そして兵役の交替の日のようによみがえりの日が来たら、また生き返ってみたいと願っています。死を願っているよりも、この痛みと苦しみからの解放を願っているのです。

14:16 今、あなたは私の歩みを数えておられますが、私の罪に目を留めず、14:17 私のそむきの罪を袋の中に封じ込め、私の咎をおおってください。

復活した暁には、神の恵みによって今数えられている罪がもはや目に留められることなく、よみがえらせてください、ということです。確かに甦る時には、新しい体を持っていますから、罪なき体ですから、神に罪を問われることはありません。

同じようにダビデが、よみがえることによる慰めをこのように歌っています。「しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。(詩篇 17:15)」今、生きている時は正しい訴えをしているけれども、目覚めるとき、すなわち復活する時はその御姿に預かっているようにという希望です。パウロはこの希望を、鏡の例えでこう言いました。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。(1コリント 13:12)」復活した時に、この世で見つめていた、信仰によって見えないものを見るようにしてみた、キリストの御姿に顔と顔を合わせてまみえることができる、というものです。

3B 望みをつぶす神 18-22

しかし、体に激しい痛みが走っているのでしょう、ヨブはすぐにその望みが心から消えます。

14:18 しかし、山は倒れてくずれ去り、岩もその所から移される。14:19 水は石をうがち、大水は地の泥を押し流す。そのようにあなたは人の望みを絶ち滅ぼされます。14:20 あなたは、いつまでも人を打ち負かすので、人は過ぎ去って行きます。あなたは彼の顔を変えて、彼を追いやられます。

痛みが走るので大水のように襲ってきて、自分が死ぬのではないかという思いが走ります。

14:21 自分の子らが尊ばれても、彼にはそれがわからず、彼らが卑しめられても、彼には見分けがつきません。14:22 ただ、彼は自分の肉の痛みを覚え、そのたましいは自分のために嘆くだけです。

ビルダデは、あなたがたの子らが罪を犯したからそうなったのだ、ということを話しましたが、ヨブ

は卑しめられようが、尊ばれようが、今、そんな見分けがつかないぐらい、肉体の痛みを覚えていて嘆くだけだ、と言っています。

これが痛みの現実です。私たちは信仰を持っていても、痛みが走っている時はこのように大水のように望みが消えるし、他のことを考える余裕がなくなるし、綺麗ごとでは済まなくなります。そして痛みとはそのようなものなのです。そこで自分の不信仰を嘆く必要はありません。痛いものは痛いのです。大事なのは、ヨブが痛みの中でも、その合間に希望を持とうとしているところです。神の真理の中に生きようと望みを置いているところです。これが神の恵みに成長することです。神を、瞬間瞬間、感じ取り、思い巡らすことが霊的なものではありません。そうではなく、感じられない時でさえ、その時にある神の真実に触れるその神の恵みを知っていることです。